

# ボランティア情報



～つながる、広がる、福祉教育～

## 福祉教育 わたしたちの実践

鳥取県 境港市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター しがともこ 志賀 智子さん



### 【地域がつながる支え愛マップづくりと避難訓練を実施】

鳥取県では、災害時に支援を必要とする人や、そうした人を支援できる人、地域の避難先などの情報を書き込んでいく「支え愛マップづくり」に取り組んでいます。災害時を想定したすけあいを考えるなかで、さらなる強固な地域のつながりをつくることを目的にしています。

境港市の中浜地区では、「支え愛マップづくり」をきっかけに、小学生を含む地区全体で津波避難訓練を実施することができました。「支え愛マップづくり」の経験がある、小篠津町の自治会長と地区担当の地域学校コーディネーター（市内の各中学校区に配置）から志賀さんに相談があり、協議を重ねた結果、自治連合会や地区社協、老人クラブなど約40団体が加盟する中浜地区各種団体連絡協議会が中心となって、避難訓練に取り組むことを決めました。

企画段階から関わっていた志賀さんはこの二人とまずは実行委員会を立ち上げ、協議会のメンバー間の合意形成を得るところからスタートしました。その後の話し合いがスムーズに進むよう、段取りを意識したと話す志賀さんたちが最初に声をかけたのは、避難所の運営や避難者の見守りなどにおいて協力が不可欠である自治連合会と地区社協でした。「この方々に『いいですよ』と言ってもらえば鬼に金棒です。実際、その後の調整はとてもスムーズでした」（志賀さん）。

中浜地区にある小学校での津波避難訓練を実施した際には、事前学習として防災士の資格をもつ協議会会長が「防災について」、そして志賀さんが「地域の人とのつながりについて」話す時間を設けました。「小学生には、避難時に自らの命を

守ることを優先しましょう。ただ、逃げている時に、周りにお年寄りやお友達がいたら、『一緒に避難しましょう』と声がけをお願いしました」（志賀さん）。

実際の訓練では勇気を出して近所の高齢者に「一緒に避難しましょう」と声をかけた小学生もいたそうです。また「自分や家族、友人だけではなく、周りの高齢者の命を守ることも大切」と感じたとの感想もありました。

「避難訓練は小学生を含む地区全体の連携が不可欠です。まず地区の各種団体連絡協議会の主要メンバーで確認をとりながら、徐々に輪を広げて仲間を増やしていくことが大切だとわかりました」と、志賀さんは振り返ります。防災と地域福祉を結びつけるこの実践は、さらに市内の多くの地区で広がっていくことが期待されます。

#### Contents

- P.2 ▶ **特集** その人の経験・知識を活かしたボランティア活動
- P.6 ▶ わたしにとってのボランティア
- P.7 ▶ キーパーソンから学ぼう！
- P.8 ▶ 災害ソ・ノ・ト・キ！ | インフォメーション

# その人の経験・知識を活かした ボランティア活動

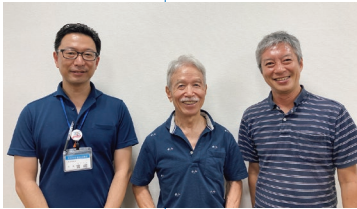
社協では「誰もがボランティア活動できる地域社会、すなわち誰も排除しない共生文化を創造すること」を使命として、多様な主体が協働しながら地域の生活課題の解決につながるとともに、誰もがボランティア活動に参加できるよう、あらゆる人の社会参加を支援しています。

今回の特集は、住民のそれぞれの強みや得意を活かして「ボランティアをしたい人」の声を聞き入れた社協の事例、ボランティアの募集についてテーマを示すことで参加促進につなげた社協の事例を紹介します。

## 事例 1

### 高い専門知識をもつ住民の声を起点に、新しい切り口のボランティア活動を展開。子どもの体験や経験の機会創出を支援する基金も設置し、多様な住民活動を支援する

#### 東京都・北区社会福祉協議会



左から、宮嶋さん、坂本さん、内田さん

北区は東京23区の北部に位置し、荒川を挟んで埼玉県と接していることから、東京の北の玄関口といわれます。JRの駅が区内に11駅もあり交通の利便性がよく、約35万人が暮らしています。新一万円札の顔であり、全社協(当時は中央慈善協会)の初代会長・渋沢栄一のゆかりの地でもあります。

北区社会福祉協議会(以下、区社協)では、数年前から学習支援や子ども食堂、ひとり親家庭の支援といった子どもの支援を強化してきました。その一環で、昨年度からスタートしたのが、小学生を対象とするプログラミング教室です。

北区社会福祉協議会

地域福祉係 子ども担当 主査 みやじま たかみち 宮嶋 貴道さん

NPO 法人チャレンジプロ

代表理事 さかもと あきお 坂本 明男さん / 理事 うち かおる 内田 薫さん

#### 子ども、若者の育ちを支える 地域づくりをすすめる基金の創設

北区は、一時子ども食堂が都内で最も多くなるなど、「学習支援」「食堂」「居場所」等の子どもに対する支援活動を行う団体等の支援の輪が広がっています。区社協は、7年ほど前に地域福祉係内に「子ども担当」を設け、子どもたちの支援を行う方々や団体のつながりの強化、必要に応じてグループの立ち上げ支援等を行います。その支援のひとつとして、子どもの体験や経験を応援する「子ども・若者応援基金」(\*)の創設に着手しました。

2021年の春、区社協の宮嶋さんの元へ一本の電話がありました。発信人は坂本さんです。坂本さんはアメリカ

のシリコンバレーで、ITの専門家として30年以上にわたり活躍してきました。シリコンバレーでは現地の大学、自治体、企業のトップ層が集まって地域課題の解決に取り組むボランティアが盛んで、坂本さんも在米中はその活動に参加してきたといいます。日本に帰国した後も地域社会に貢献したいと考えていた坂本さんは、区社協の存在を知り、問い合わせたのでした。

#### ボランティアをする人の側から 新たなニーズを創出する

坂本さんからの問い合わせに、既存の子ども食堂や学習支援教室を紹介しました。しかし「坂本さんのご希望に

マッチしていない」と感じ、改めて坂本さんと話し合ったところ、坂本さんがプログラミングのプロフェッショナルだということを知りました。宮嶋さんは、「それならプログラミングを、と口をついて出たものの、前例のない活動なので、正直戸惑いました。坂本さんは一人でできるとお考えでしたが、地域の活動は仲間とともにするのが一般的なもので、まずボランティア仲間を募集しましょうと提案しました」と振り返ります。坂本さんは、プログラミングの指導が福祉になるとは思っていませんでした。「当初、ボランティアや福祉と聞いて、貧困やひとり親家庭の子どもたちの支援をイメージしていました。しかし、宮嶋さんから、地域社会を発展させる

(公財)齋藤茂昭記念財団「2023年度 助成事業」(2023年10月31日締切)

助成金情報

障害者、LGBTQをはじめとする社会的マイノリティの能力発揮とQOLの向上に向けて、下記のような支援活動を行う団体および個人に対する助成。(詳細は「齋藤茂昭記念財団」で検索)

のも福祉の一つだと聞き、それならぜひやりたいと思いました」（坂本さん）。

### 趣旨に賛同する仲間が集まり、準備が着々と進む

坂本さんが子どもたちにプログラミングを学んでほしい理由は、第一に高度な技能の習得が貧困からの脱却につながるからであり、第二にIT技術で日本が世界に遅れを取る現状を覆す、イノベーションを起こす人材を北区から輩出したいという壮大な目標があるからでした。そこで、スクラッチやマイクラフトといった子ども向けのプログラミングではなく、より本格的なテキスト言語、Python(パイソン)を教えることにこだわりました。

それには高い専門知識をもつスタッフをそろえる必要がありました。宮嶋さんは広報誌で募集をかけ、坂本さんは知人に声をかけたところ、講師として約40名の方が登録してくれました。「名だたる電機メーカーやIT企業の方が勢ぞろいしました」（宮嶋さん）。

こうして加わった一人が、内田さんです。内田さんは、情報科学研究科で大学院生を指導する教授ですが、「自分が学んできたことをより広く次世代に伝えたい、恩返ししたいという思いがありました」と参加の経緯を語ります。講師はできないが運営の手伝いなら、と手をあげてくれた人もいました。なかには、保育士の資格をもつ人もいました。坂本さんにとっては子どもに教えることが初めてだったり、コロナ禍で検温や消毒が必須だったりするなかで、子どもに接し慣れている方の協力は、非常に心強いものでした。



わからない時はボランティア講師がヒントを出し、子ども自らの気づきや工夫を引き出す

### 基金のモデル事業として活動がスタート

団体名は、「プログラミングチャレンジ」と決まりました。

着々と計画が進行する一方で宮嶋さんは、社協の活動としてこの取り組みの承認を得るのに苦心しました。「前例がないうえ、子どもが通える夕方以降の開催になることもネックでした。そこで、坂本さんと何度も協議を重ねて企画案を磨き上げ、私自身も区社協内への説明資料を作成するなど、区社協内の理解を深める工夫をすることで、無事に承認を得ました」（宮嶋さん）。

さらに問題だったのが資金の確保でしたが、ちょうど北区社協の子ども・若者応援基金が発足し、2022年から助成を始めるタイミングだったため、プログラミングチャレンジとして応募し、モデル事業として交付を受けることができました。基金で足りない分は、坂本さんやスタッフが負担しました。2021年の秋には、参加希望者への説明会が開催されました。子どもたちの参加に求めた最大の条件は、やる気があることです。また、表向きは子どもの貧困についてふれることはありませんが、実際にはひとり親家庭や生活保護家庭の子どもを優先する配慮も取られました。

### 長いスパンで見た地域社会の発展も、福祉のひとつ

2022年5月からプログラミング講座が始まりました。内田さんの「本を読まない子もいるだろうから」との配慮で、テキスト教材に加え、YouTubeのレクチャー動画も用意されました。初年度の参加者は小学4～6年の12名。パワーポイントで自己紹介スライドを



1年間の集大成として各自Pythonで作ったゲームを発表。坂本さんから修了証を授与する

作成し発表したり、オリジナルのゲームを作ったり、12人全員が、1年間で大人が驚くような成長を見せました。

2023年度からは、「チャレンジプロ」と名称を改め、NPO法人化しました。チャレンジには、挑戦する人を育てたいという思い、プロには、プログラミングとプロフェッショナルの意味が込められています。小学生14名が参加し、週2回の講座は毎回活気にあふれています。坂本さんは子どもたちから「あきじい」の愛称で親しまれ、「いきなり14人の孫ができたようだ」と喜びを隠しません。講座は、一人ひとりがそれぞれのペースで学ぶスタイルですが、理解に時間がかかる子には、坂本さんが個別に補習授業を行うこともあります。また、まだアルファベットもおぼつかない子どもが英語のテキスト言語を扱うことになるため、坂本さんによる英語の授業も含まれています。

チャレンジプロは、趣旨に賛同してくれる人を増やし、活動を全国に広げようとめざしています。特に企業のトップ層に関心をもってほしいと、坂本さんは主張します。「アメリカの子どもは、人と違うことをすることに価値があると教わって育ちます。日本では逆です。それなのに会社に入ると突然、イノベーションを起こせと言われる。幼い頃からその芽を育てることが必要です。企業にとっては、未来の優れた人材になるのですから」（坂本さん）。

区社協にとってもチャレンジプロの成功は、ボランティアの裾野の拡大につながる大きな成果でした。この経験をもとに、ボランティアを始めたい側の要望や専門性を起点にした活動や、地域社会の発展を主目的とする活動に、区社協は今後も自信をもって取り組んでいくことになるでしょう。

(※) 子ども・若者個人に直接行う助成と、子ども・若者の経験体験に関わる活動に取り組む団体への助成があり、そのほかにも子ども・若者の経験・体験を支える人材の育成、基金の活動をさらに広げるための基金運営事業が行われています。個人助成については映像、音楽といった表現活動に使う機材、スポーツや研究に必要な備品、キャンプなどの自然体験に係る費用など、審査会で承認された後、子ども・若者に交付されます。

#### 助成金情報

#### SOMPO福祉財団「認定NPO法人取得資金助成」(2023年10月6日締切)

地域の中核となり、持続的に活動する質の高いNPO法人づくりを支援し、「認定NPO法人」の取得に必要な資金を助成。  
(詳細は「SOMPO福祉財団」で検索)

## ▶ コロナ関連の対応や新たな地域福祉活動計画の提示を通して、住民から多くの支援を受ける。自ら「たすけて」と言える社協に

### 三重県・伊賀市社会福祉協議会



左から、清水さん、一見さん、里中さん

#### 伊賀市社会福祉協議会

企画調整課 課長 里中 真紀さん / ファンドレイジングマネージャー 一見 俊介さん  
企画調整課 しみず みずほさん

伊賀市は、京都府や奈良県、滋賀県と接し、古くから交通の要衝として栄えてきました。人口は1980年頃から緩やかに増加していましたが、近年は減少傾向にあります。一方で、外国人住民数は三重県全体として増加傾向で、伊賀市は人口86,334人(2023年6月末現在)のうち、外国人住民数の割合が県内2位の6.44%を占めています(2022年12月末現在)。

伊賀市社会福祉協議会(以下、市社協)では、こうした地域性を含めたさまざまな地域生活課題をわかりやすく提示することで、住民や企業の地域活動への参加を促進しています。

### 課題を明確にして呼びかけることで、一人ひとりの気持ちが動く

伊賀市は、住民による地域福祉活動が活発で、たすけあいの意識が醸成されています。その一方で、市社協は住民一人ひとりの力をさらに発揮してもらうためのアプローチ方法を模索していました。そのひとつとして「第4次伊賀市地域福祉活動計画(2021～2025)」(以下、計画)を策定し、地域住民の方々や関係機関への周知活動を検討していたところ、新型コロナウイルス感染症が流行し始めたのです。

市社協では、2020年4月から5月にかけて生活困窮者の相談件数が急増したことから、市内に広く支援を求めようと、同年6月に緊急支援募金を開始しました。すると、住民をはじめ企業から多くの寄付が集まり、目標額300万円のところを600万円近くにも達したのです。さらに、市内の米農家からは米の寄付が2.2tも集まりました。

なかでも特に印象的な出来事として、一見さんと里中さん、清水さんがあげるのが、第7波の感染拡大を受け、2022年8月に行った2度めの緊急支援募金での出来事です。小学3年生の女の子が母親と一緒に市社協を訪れ、自

身のお小遣いで購入した新生児用の紙おむつやトイレットペーパーなどを寄付してくれたのです。母親によると、地域で困っている人がいることを家庭で話したところ、女の子自ら寄付をしたいと考え、親子で物資を選んで届けてくれたのだそうです。「ご家庭で話し合い、お子さん自身が寄付をしたいという気持ちになってくださったことが、とてもすごいと思いました。本当にうれしかったですね」と3人は口をそろえます。

こうした寄付を巡るさまざまな出来事は、市社協にとって「課題を明確にして呼びかけることで一人ひとりのボランティアな気持ちが動く」ことを実証する経験となりました。

### フードパントリーで外国人住民の通訳ボランティアが支えに

市社協が緊急支援募金と並行して進めたのが、緊急食糧提供事業です。市社協では2009年から生活困窮者などを対象とした食糧支援を実施していましたが、コロナ禍の影響により需要が急激に高まり、従来の事業の財源だけでは対応が難しくなりました。そこで、2020年6月に中央共同募金会の「フードバンク活動等応援助成」を申請し、100万円の助成金

を市社協の「新型コロナによって“今日食べることに困る人をゼロにする”プロジェクト」に活用しました。

この財源をもとに注力したのが、フードドライブとフードパントリーです。市社協にとって経験の少ない取り組みであったため、すでに地域で実践していた子ども食堂やNPOなどからノウハウを学び、協働で事業に取り組みました。特に重視したのが、伊賀市の人口の約6.5%を占める外国人住民への支援です。外国人住民は(在留資格の制約により)非正規雇用など不安定な労働条件で働いていることが多く、コロナ禍による不況の影響で失業者が増えていたのです。

より多くの食糧寄付を募ると同時に、一人でも多くの外国人住民に食糧を配布するため、オンラインの申し込みフォームは7言語、募集チラシはフー



外国人住民向けフードパントリーを訪れた家族の車に食糧を積み込む

ドドライブで3言語、フードパントリーで8言語と、多言語で作成しました。

1回目のフードドライブは2020年8月6日に実施し、91名10団体から食糧の寄付を受け付けました。アレルギーなどを考慮したうえで箱詰めし、同月9日に外国人住民向けフードパントリーで61世帯171人に提供しました。同時に生活相談窓口を開設し、困り事の聞き取りと必要な情報の提供も行いました。この時、通訳として手伝ってくれたのが、ブラジルにルーツのある外国人住民です。母国でも教会をベースにボランティア活動をしているようで、以前から「何かボランティアをしたい」と市社協を訪れていたそうです。清水さんは次のように振り返ります。「ポルトガル語のほかにスペイン語も話せるという特技をおもちなのでご相談したところ、とても積極的に協力してくださいました。言語が伝わると、外国人住民の皆さんも安心されるのです。おかげでスムーズな受付ができ、お困りの方に寄り添う支援ができました」。

これをきっかけに、市社協主催のフードパントリーに通訳ボランティアとして毎回参加し、活躍いただきました。

### コロナ禍により地域福祉活動計画の策定にも新たな工夫

コロナ禍の影響により、新たに策定する計画に対する住民からの意見聴取にも工夫が必要となりました。これまでは会議の場で、住民参加による課題の洗い出しをしてきましたが、コロナ禍により人を集めることが難しくなり



コロナ禍で自宅待機を求められた住民に食糧などを配達する「おたがいさま便」の箱詰めセット

ました。そこで市社協は、地域生活課題を伝える3～5分の動画を4本立てで作成し、住民に視聴してもらい、Webアンケートで意見や感想を求め、課題の整理を行います。さらに確認が必要な箇所については、電話等で繰り返し住民に意見を求め、修正を加えながら計画を完成させました。実はこの計画が、コロナ禍において地域に支援を求める際、大いに役立ったのです。

### 「おたがいさま便」への協力依頼を通して得たもの

計画では、地域生活課題を「子どもの貧困」「健康寿命」など12のテーマに分け、テーマごとに「実現したい目標」「課題の原因」「課題解決のための対策」など7項目をまとめました。この工夫により、住民や企業の地域活動に対する参加の仕方が明確になったのです。具体的に効果が表れたのが、市社協が2021年2月から行った「おたがいさま便」の取り組みにおいてです。これは、コロナ感染者や濃厚接触者となり、自宅待機を求められた住民に食糧や日用品を配達する活動です。想定以上の申し込み数で市社協の職員だけでは対応しきれなくなり、住民や企業に食糧などの箱詰めや配送作業の協力を依頼することになりました。その際、計画の内容を提示し、地域生活課題を示しながら相談に回ることで、快く協力してくれる住民や企業が増えたのです。一見さんは「自分が暮らす地域にこうした課題があることを知らなかった、知ることができてよかった、という反応をいただき、

皆さんがそれぞれの立場でできる支援をしてくださいました」と振り返ります。

このように、市社協では計画に盛り込まれた具体的な課題を示し、住民や企業の得意分野に絞って協力を依頼することにしました。そして、さらに一歩踏み込んだ試みとして、ホームページで市社協の事業と一緒に応援してくれるプロボノの募集を開始しました。具体的には、カメラや動画の撮影・編集、助成金獲得や企画支援、翻訳、法律、広報、宣伝といった、今の市社協に不足していると思われるスキルをもつ人材を募集しています。これにより、例えば地域住民でカメラが得意な方が撮った写真を用いて広報誌に掲載したり、終活に関する取り組みを専門家と協働で進めるための具体的な道筋をつくっています。里中さんは「たすけてと言える社協になったことが大きいです」と語ります。「今まで私たちは、住民に『おたがいさまの地域づくりのためにたすけてと言いましょ』と伝えてきました。しかし、社協自身がそれを実践できていませんでした。課題と目標を明確にして私たち社協から『課題解決のために、あなたの力が必要です。』と言えるようになったことは、今後、地域のさまざまな人たちの協力を得るうえで非常にプラスになります」（里中さん）。

一見さんは今後について「特に子どもの貧困と社会的孤立の課題解決に力を入れていきたいです」と展望します。市社協のテーマを絞った呼びかけがあれば、これからも地域からさまざまな協力を得られることでしょう。

#### ボランティア・プロボノで支える

Volunteer / Pro-bono

##### 現在募集中のプロボノ

1

カメラの技術や知識を活用して社会問題の現状を伝える写真を撮る

2

社協活動の動画撮影・編集作業

3

ファンドレイジングの知識を使ってボランティア団体を支援する

4

語学の知識を活かして、チラシや案内の翻訳や通訳をする

5

法律に関する相談を受ける

6

社協活動の広報や宣伝をする

伊賀市社協のホームページより、プロボノを募集するページ（一部抜粋）

#### あなたの時間やスキルを使って、地域のために活動しませんか

#### 助成金情報

(公財)キリン福祉財団「令和6年度「キリン・地域のちから応援事業」(2023年10月31日締切)

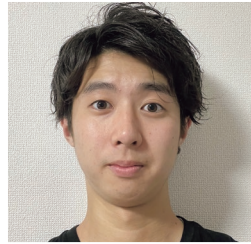
地域に根づく福祉活動として、地域やコミュニティを元気にするさまざまなボランティア活動を応援する助成。

(詳細は「キリン福祉財団」で検索)

# わたしにとってのボランティア

## 次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協VCが若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。



熊本大学生協同組合  
組織部 部長  
熊本大学文学部2年  
和田 琉聖さん

### 第6回 熊本県 熊本大学生協同組合 組織部

#### 団体紹介

組織部は、熊本大学生協の学生委員会として、学生の声を生協の運営や活動に活かしていく組織。Peace Now! は、全国大学生協連の組合員向けの、平和を考える体験型プログラム。全国の大学生協の学生委員有志が実行委員を務めている。

## 生協の学生組織のリーダーを務め、長崎で平和を考える体験型プログラムも企画・運営

### 現在、どのような活動に取り組んでいますか？

熊本大学生協の組織部は66名の学生で運営しており、私は部長をしています。主な活動としては、新入生や編入生、留学生との交流会を開催したり、七夕に「生協への願い」を短冊に書いてもらうなどのイベントを企画したりしています。また、地域のNPO団体にお声がけいただき、ゴミ拾いなどのボランティア活動も毎月行っています。

また、Peace Now! の実行委員も務めています。私は長崎での開催を担当する9名の委員のひとりで、全国から参加する生協組合員（大半が学生）に、原爆資料館の見学や平和祈念式典の映像視聴、被爆者による講話などを体験してもらい、「戦争や被爆に関してどう感じたか」や「平和をどう考えるか」についての意見交換をしてもらうプログラムを企画・運営しています。2022年度は主に事前学習会の担当を務めましたが、2023年度はプログラム全体の企画を行っています。

### 生協組織部に参加した理由や活動の魅力は？

大学入学時に組織部が主催する交流会

に参加しました。その際、ある先輩が私の大学生活への不安を丁寧に聞いてくださり、的確なアドバイスをしてくださりました。そんな先輩と一緒に活動したいと思ったのが、組織部に入った理由です。

組織部は、一人ひとりが自分の強みを活かして活動するのが魅力です。SNSが得意な人は広報を担当したり、英語が得意な人は留学生との交流会で活躍したり。私の強みは皆の意見をまとめるリーダーシップだと感じているので、部長に立候補しました。

### Peace Now! の実行委員になった理由や活動の魅力は？

私は高校まで長崎県で育ちました。長崎県では夏休み期間中であっても、8月9日は登校し、皆で平和祈念式典をテレビで見るのが当たり前でした。しかし、大学に入学してみると、8月9日が長崎の「原爆の日」であることすら知らない人が多く、大きな衝撃を受けました。被爆者の高齢化が進んでいるなか、私たちが原爆について語り継いでいかないといけない世代だと感じていたのもあり、もっと多くの人に長崎の原爆被害に関して深く知ってほしいという思いから実行委員に応募しました。

そして、大学卒業後は長崎に戻って教師になるつもりです。いずれは子どもたちに平和学習を行っていく立場になるので、Peace Now! の企画・運営を担うことで貴重な経験ができるとも考えました。実際に、実行委員を務めることで「どうすれば被爆や平和に対して考えを深めてもらえるか」などを考察する機会が多いので、非常に貴重な経験ができています。Peace Now! を通して、今後も参加者が平和について考える有意義な体験

を提供していきたいです。



長崎原爆死没者追悼平和記念館にて。戦跡や石碑、米軍基地などさまざまな場所を訪れる

### 社協VCが若者とつながるには？

ボランティアセンターとしていかに若者とつながる接点を増やしていけるかが大切だと思います。ボランティアに理解のある大学の先生とつながる、若者がいそうなイベントに行ってみるなど。社協の皆さんが得意とされるアウトリーチですね。

日本生活協同組合連合会  
組織推進本部 社会・地域活動推進部  
地域コミュニティグループ  
まえだ まさひろ  
前田 昌宏さん

#### イベント・講座情報

日本福祉教育・ボランティア学習学会「第29回新潟大会」のご案内（2023年11月4日・5日開催）

第29回新潟大会テーマは「豊かさとはなにか〜共に生きること、共に学び合うことの価値〜」。2日間の大会という共に学び合う空間のなかで、大いに議論し、参加した私たちがエンパワメントされ、社会をポジティブに変えていく、新潟大会がそのような場になることを願い開催する。（詳細は「日本福祉教育・ボランティア学習学会 新潟」で検索）

# キーパーソンから学ぼう!



お互いにつながる  
はじめの一步

人と人のネットワークをつなげながら、人々の生活に直結するさまざまな困りごとにアプローチをしているキーパーソンを紹介します。

さまざまな分野のキーパーソンから協働のヒントを探り、読者の皆さまもはじめの一步を踏み出しましょう!

第6回

## 若者支援を出発点に 地域活性化にも取り組む



新潟県  
NPO法人  
にいがた若者自立支援ネットワーク・伴走舎  
事務局長 あおき ひろき 青木 洋之さん

新潟県新潟市出身。20代で1年間ほどひきこもり生活を経験したのを機に、市民団体の活動などに参加。その後、2009年から伴走舎の立ち上げメンバーとして本格的に若者自立支援に従事。現在、地域活性化の中心的存在として活動を行う。

### 自分の体験や学びを還元したい という思いが原点です

私は大学卒業後、一度は就職したものの、些細なつまずきからひきこもりの生活を送りました。幸いにも私には、「この人についていきたい」と思う憧れの存在がいたことから、勇気を出して彼の懐に飛び込み、彼のもとで働くようになりました。与えられた仕事に貪欲に挑戦するうちに若者支援に関心を持ち、セミナーや講演を行う市民団体で活動するようになりました。しかし活動を重ねるほど、もっと当事者に寄り添った支援をしたい、それには居場所となる空間が必要だという思いが強くなりました。そんな時に伴走舎の現代表と出会い、「野菜を販売する事業を始めたいのだが、一緒にやらないか」と誘われ、ともに伴走舎を設立するに至りました。

### 地域との関わりが、若者の成長を後押ししてくれます

伴走舎の施設「沼垂<sup>ぬまつり</sup>よりどころ」には、困難をかかえる若者や障害のある方が集います。最初は通うだけで精一杯でも、慣れてくると私たちスタッフと一緒に、野菜の販売や草むしり、障子の張り替えなどの軽作業、宅配や行商などに参加するようになります。活動拠点に沼垂地区を選んだのは、私の提案でした。私の育った場所でもあるのですが、ふだん

は静かな町なのに、祭りやイベントとなると、こんなに人がいたのかと思うほどのにぎわいになるのです。沼垂のコミュニティ力は、近隣の地区に比べ突出しています。今の若者は、親や教師以外の大人と関わる経験が圧倒的に少ないと感じています。特にひきこもりなどの当事者では、その傾向が顕著です。彼らに自信や経験を得てもらうには、地域ぐるみで人を育ててくれる沼垂地区が一番だと直感したのです。

### 伴走舎で成長し、この町で活躍してもらおうのが夢です

彼らと接する際に意識しているのは、失敗を体験してもらうことです。なぜなら失敗からの学びこそが、糧になるからです。私にとっては、彼らの成長が何よりの喜びです。先日、伴走舎に通い始めた若者の一人が、本当は人と話すのが苦手なのですが、伴走舎主催の地域住民との昼食会に「次回から参加していいです

か」と、自ら意思表示をしてくれたのです。これには思わず泣いてしまいましたね。

地域の人や団体と「連携している」などという意識を一度ももったことがないほど、私たちの活動は地域に根づいています。どこかで困りごとが起きれば、当たり前のように私たちに声がかかります。町の活性化にも貢献しています。10年ほど前、町内の空き店舗の一部を新たに開発することになった際には、伴走舎として内装工事などを手伝う一方で、そこに新しくオープンする店に働き手として若者を送り込みました。その若者は、今では沼垂ビールの職人で、店になくはない存在です。ほかにも伴走舎での活動を経て、地元の飲食店などに雇用してもらうケースが増えていきます。残りの空き店舗やシャッター街もすべてリニューアルして店や会社を作り、伴走舎で成長した若者全員を、店長・社長にしたいというのが私の壮大な夢です。



リヤカーに食品や雑貨を載せて販売に回る



最も需要が多い草取り。若者総動員で取り組む

#### 書籍紹介

『月刊福祉』2023年10月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

特集は、「2040年を見据えた高齢者支援のこれから」。2040年、日本は急速な人口減少と高齢者人口がピークに達することで、さまざまな社会問題に直面すると考えられている。2040年の姿を具体的にイメージすることで、今、そして今後、求められる制度や支援を明らかにする。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

## 災害ソノトキ!

～災害時の連携に向けて、  
平時から考えたい協働の視点～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携協働が必要不可欠です。

本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

## 第6回 愛媛県 宇和島市社会福祉協議会

## 平時からの無理のないつながりを通して本音を言える関係性に

宇和島市社会福祉協議会  
地域福祉課 課長  
まつだ しんいち  
松田 伸一さん社会福祉協議会  
宇和島市社会福祉協議会  
地域福祉課 主査  
せいけ まさたか  
清家 正崇さん

## 宇和島市で発生した災害と市社協の対応、ボランティアの動き

平成30年7月豪雨において、宇和島市では住宅被害が約1,700件発生し、2つの地区で断水が約1か月続きました。当市は交通の便がよいとはいえ、被害状況もあまり報道されなかったことから、発災から1週間はボランティアが集まりませんでした。しかし、青年会議所（以下、JC）をはじめ、県内外の社協、災害支援に取り組むNPOなどの支援で何とか災害ボランティアセンター（以下、災害VC）を運営し、最終的には約60日間で1万人ほどのボランティアにご支援いただきました。

## 支援活動を振り返り、次の災害に備えた取り組みを進める

被災経験を次に活かすため、市社協内に加え、外部の関係者や専門家を交えて検証会議や課題検討会議を行いました。その際、大きなテーマとしてあがったのが



今年度で開催した災害ボランティア連絡会の様子

災害を見据えた連携についてです。今回の災害でも、最初から顔の見える関係性ができていればもっとスムーズな支援ができたであろうと、皆の意見が一致していました。そこで2020年、行政、JC、NPO、金融協会、生活協同組合などに声をかけ、災害ボランティア連絡会（以下、ボラ連）を立ち上げました。以降、年1回のペースで集まり、さまざまな話し合いをしています。例えば、2020年は被災時の振り返りとして、できたことやできなかったこと、得意なことや苦手なことを共有しました。翌年は少人数のグループに分かれ、支援活動で心配なことや事前に知りたいことの共有に

加え、役割分担を行いました。昨年は災害支援の専門家を招き、災害VC運営時によく起こるトラブルへの対応について話し合いました。そして今年は、お互いが「顔の見える関係」から一歩進んで「何を考えているのかわかる関係」になるため、腹の内を見せ合おうということになりました。被災時、「実はこういう点で困っていた」と、まだ打ち明けていなかった本音や弱い部分を見せ合うのです。この試みは各団体から好評で、お互いの理解を深めることができました。

## 年1回の会合でもこまめな声かけでつながりを強くし、たすけ合える地域に

実は、ボラ連の会合を企画した当初は「年1回の開催では少ないのではないか」と思っていました。しかし、会合をきっかけに関係者と通常業務のなかであいさつをしたり、講座やイベントにお誘いしたりと、災害に関係のないことでも小まめに声をかけることで、よい関係性を築けている実感があります。むしろ、年に何度も開催すると参加者の負担になる場合もあるので、年1回くらいが平時から無理なくつながるポイントだと感じました。

一方、被災時は地元住民のボランティア参加が少なかったとの課題もあるため、住民向けに災害ボランティア養成講座を年1回で開催しています。コロナ禍により中止した年もあるため、今は災害時の基本的な心構えに関する講座を行っている段階です。また、「災害ボランティア事前登録制」を設け、災害時にボランティアとして協力してもらえ、住民を増やす仕組みも整備しました。こうして平時からつながる工夫をすることが、困った時にたすけあえる地域をつくるために必要だと感じています。



災害ボランティア養成講座で聞き取りのシミュレーションを行う

## インフォメーション 市区町村社協 VC 強化方策 2023 を HP に掲載しました!

## いま改めて、ボランティアセンターの役割や機能を考えませんか?

全国の市区町村社協のボランティアセンターの当面のあり方や取り組みの方向性を示した「市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター強化方策2023 ～社協VC5つの役割と25の視点～」

を策定しました。ホームページからダウンロードいただき、ぜひご活用ください!

● ボランティア・市民活動推進情報ページ  
<https://www.zcwvc.net/volunteer/reference/zenshakyo-vc/>  
全社協VC強化方策2023 で検索